

# 尔鹿子

THE HISTORY OF THE

5月

鈴鹿呂仁

拾掬集 その九十二



みちづれの星を佳客に水仙忌  
嫁ぐ日の泣き虫の父春障子  
赤面の至りミトソテイス知らず  
ゆきやなぎ外面良しと内申書  
子雀の町屋に惑ふ通し土間

東京支部定例会

かげろへる東京まんなかに私

吟行・伏見界隈

酒蔵を維新走りに花の町  
利き酒に酒屋格子のかげろへる  
黄桜の暖簾に酔うて花見酒

「暁」百号記念五句 「薔薇の大夢」

薔薇の芽に宿る愛誌の百の夢  
あかつきの薔薇の一花のプロローグ  
向学の輪のすくすくと薔薇の季とき  
老木の手中の薔薇や艶めきて  
常しへの絆の芽生え薔薇百花

近詠

名誉顧問

和田 照海



## 徒遍路

徒遍路そろそろ黒潮一丁目  
磯地蔵ゆつくり沈む春の潮  
泊船のいづれも春の灯をこぼす  
東京遠し春の絹霽ばかり追ひ  
矢印が迷ひのはじめ花の駅

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



## 深紅の薔薇

小雪舞ふ山河を無垢に無垢に  
雪うさぎ野に跳ねるかに雫して  
バラードが終る夜の雪しんしん  
落葉径足裏のひびきと心音と  
バースデイ深紅の薔薇を抱きしめむ

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



梅一輪

秘めをかむ大吉ゆゑの初みくぢ  
 女正月踏めばすぐ開く白動ドア  
 気遣ひは人知れずこそ梅一輪  
 初蝶と前振れもなき出会ひかな  
 告げざる愛迷はずに引く寒の虹

牡丹 沼田巴字

想ひ今 北川孝子

檜落葉清き音あり光あり  
 檜落葉後世のことは人まかせ  
 雨の中傘を欲しげや初牡丹  
 出し惜しみなき人生や牡丹咲く  
 母の日や母といふ字をきりり書く

想ひ今生きているよとうす紅葉  
 あぶり餅雲の行く手に青葉濃し  
 ながらへて諸々の風五月寒  
 かりそめと想へば楽し五月過ぐ  
 もういいかいまあだだよと青葉風

春惜しむ 植村蘇星

少女 直江裕子

今を生くすべてが師なり今朝の春  
 祖のお陰げ妣の口ぐせ春來たる  
 悠然と出合ひに別れ春惜しむ  
 人の世の定めなりしや春惜しむ  
 ほんはかと芽吹く稜線風そよぐ

陽炎のまん中惑ふ少女  
 切り株の暖か羽のあるもの來  
 襲の字のルーペに大き冬の卓  
 冬たんぼぼだあれも居ない休み石  
 返上のひとつに夫のふところ手

遠のく 高木晶子

てのひらで計る確かさ寒卵  
一夜明け雪景色なる非常識  
鉄瓶の湯気傍らに腹を据え  
雪道を歩き遠のく志  
節分の賑はひ戻る菓子売場

隠遁 奥田筆子

永き日やさがしに来ないかくれんぼ  
宝石店雪搔買つて雪を待つ  
老木に転機大きな冬芽あり  
寒ざくら距離の淋しき話し合ひ  
離陸までかるく目をとぢふきとう

地に消ゆる 伊藤希眸

咲きさうな椿はピンク屋敷神  
異郷長し母の袖丈また計る  
季はづれの大雪予報コロナ殖ゆ  
自らの粒の大きさ雪降り  
牡丹雪着地の音は地に消ゆる

花莫塵 井上菜摘子

足湯して五月の空と五月の樹  
麦秋の乗換駅がまだ遠い  
虹立つやある日遺品となる句帳  
もう競ふなき友垣や草の笛  
花莫塵のみしらぬ花に坐りけり

# 神麓集

子猫 山中志津子

一片の雲に日陰る初景色  
名人は少し垂れ目の福笑ひ  
自販機の外は異界や冬夜霧  
枯蓮を結界に村うづくまる  
戦場にとり残されし子猫かな

満目の 鷺山珀眉

泡沫の三つ四つふたつ春を待つ  
地球儀をなぞる真昼や鳥曇り  
三寒の仔犬四温のまねき猫  
満目のはや喝采のもの芽よ  
魚は氷に上り天気は下り坂

母の日 井尻妙子

飴色の玉ネギ母の日のカレー  
ジャンケンの真ん中柏餅一つ  
奥嵯峨になほ奥のあり水仙忌  
オクラホマミクサー卒業の日はるか  
春障子愛猫膝を離る朝

白さざんか 亀井福恵

白さざんか暮れ残りつつ暮れゆけり  
まどろめる吾を置き去り嫁が君  
七種粥馴染みて五臓六腑あり  
鏡餅心鎮めの神ならん  
人を待つ彩深かりし実万両

夢を追ふ 西村 白杼

一壺天

安田 優歌

夢殿の夢を追ひかけ亀鳴きぬ  
保津峡や俯瞰の溪流冴返る  
天地へ白が白生み冴返る  
猫の子の知恵を借りたし処世術  
三角形四人で話せば雪どけに

春宵の空の深さや一壺天  
風花の光をまとふ一行詩  
身の内の薄氷のこゑ闇の燭  
白鳥搏く夕日の焔へと  
寒紅や秘仏に逢ひし日は淡く

春呼ぶ 菊池 和子

飛花落花 本郷 公子

寒雀風はピカソの三角形  
寒椿落ちて花卉を開ききる  
冬草の根に育てをり意地ひとつ  
三寒の底の底にも日の命  
玉砂利の詩が春呼ぶ翔みくじ

梅東風や神へ一步と白砂踏む  
恋猫の迷路となりぬ京の路地  
飛花落花余生に秘むるころざし  
紙漉や水の攻め上ぐ白一重  
雪中花夫ありし日の朝な夕な

### 神麓集

### 神麓集

峰の素顔 石原 孝人

花 翳 山田 和

若水や深き釣瓶の音を汲む  
たたなづく峰の素顔や初山河  
春寒の陽ざし惜しみて麵干場  
嶺々の遠近画す棚霞  
棚田落つ水音硬し冴返る

剥落の仁王の肋骨囀れる  
曼荼羅の美男仏や初桜  
花翳のゆるる小町井壺中の天  
梅真白石牛へ積む願ひ石  
墨太の合格の絵馬桜東風

梅日和 佐藤 千恵

雪催小さくたたむ覚書  
病室の空は真四角ちゃんちゃんこ  
春暁や雨音にまたまどろみぬ  
まどろみの中へ冬蝶入れてやる  
梅日和おくすり手帖三冊目



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

### 水琴集

薄水のはさまに昭和京町屋 習志野 上野 紫泉  
四条大橋魚形うごき春來たる  
地藏の手わが晩年を指す立春  
白梅の遠くより呼ぶ女坂  
此々はどこ車窓にせまる雪の幕

水音の嗚びて來たる草水柱 朝倉 小池かつえ  
寒雀群れ翔ち一樹空つぽに  
鳶の輪の歪に流れ寒波來る  
寒釣のリリース多くして暮るる  
竹林の雪のしづれの絶え間な  
幼子の声葉牡丹の渦ほどく 西宮 山本 正  
葉牡丹や母子いつしか密は粗に  
待春や首を伸ばして待つ報らせ  
新天地百万ドルの百寒灯  
寒灯下服喪の友へ探る語句

野次馬のこゑが惑はず福笑ひ 草津 倉橋あつ子  
漕艇の男声揃ふ寒の琵琶  
三猿の二猿に初音廣申さん  
寺宝へときさらぎの廊深入りす  
陽を囚ふ二月の雲を密にして  
七日粥爪半月の確とあり 福山 大塚 文枝  
田作りのあばれ乾きの五六匹  
嚶嚶と問答かはす初鴉  
結界のはじめは鳥居寒詣  
死ぬまでの友は俳句と五万米炒る  
如月の風の手触り肌ざはり 岡山 岸本 順子  
はらからと己がゆく道別れ雪  
荃立ちや鳴子こけしの目鼻立ち  
春北風涙と多謝の昨日今日  
百千鳥兎角この世は住みにくし

杖植ゑる傘立て寒の整骨院 青梅 金子 野生  
しんみりと潰れる者も年忘れ  
一木の長き梁年守る  
願一つ土産は八方除けの餅  
夢はじめ“動く車道”で詣でけり  
夢はじめ不思議な距離に夫とある 福山 横溝 和恵  
裸木や押せば生命の押し返す  
てのひらの包むてのひら寒の入り  
初詣ごめんと三文字だけの絵馬  
いのちてふ手の温もりや寒椿  
日捲りの逃げ足早し女正月 村上 禎女  
あんたがたどこさ跳ねたる竜の玉  
疫禍愁ふ八十億の虎落笛  
漱石の猫思案なる赤海鼠

# 英華採集

杖植ゑる傘立て寒の整骨院

青梅 金子野生

歳を重ねると足腰が弱くなりどうしても杖に頼らざるを得なくなる人が多い。掲句の作者も身体の何処かに痛みを覚え整骨院に来ているのである。そこで見た異様な光景が傘立てに所狭しと差し込まれた杖の数に違いない。恐らく作者の杖の一本が加わったと見るのが自然であり、上五を「杖植ゑる」としたことで遊行句として昇華したことになる。この措辞を巧みに響き合わせたのが季語の「寒」であり春夏秋冬どの季節もこれには勝らない。

夢はじめ不思議な距離に夫とゐる

福山 横溝和恵

元日の夜から二日の目覚めまでに見る夢を初夢と言つて俗に「一富士二鷹三茄子」は吉夢と言われている。さて、この句は実に不可解な感覚にさせられるが、元来、夫婦は他人同士が縁合つて一緒に暮らしているわけで夫々二人の距離はその親密度、環境によりかなり異なってくるのではないか？上五の季語「夢はじめ」を配したことで作者の意図が鮮明になる。あくる朝、初夢の話に二人が同じ夢を見た、と知れば夫婦間の距離は不思議さを増すだろう。

日捲りの逃げ足早し女正月

福山 村上禎女

本来は、元日の男正月に対しての小正月を女正月と呼んでいたが、暮から正月にかけて忙しかった女性たちの骨休みの意味合いを込め一月十五日を女正月としている。掲句は、今年の新しい日捲りカレンダーを新年より気持ち新たに毎朝捲つてきたものの早や松の内も終わりを迎え、時の経過の早さを感じているであろう。女正月を楽しむどころか今年も時間に追われ日々を暮らしていかなければならないことに一つの憂いがそこにある。